スキーと山

第六十三號

札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十五年七月二十八日印刷納本
大正十五年八月一日發行（毎月一回一日發行）

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第六十三號目次

記事

思出 Erinnerung　大島亮吉　〔二〕

登山史上の人々
—ゲオルク・ウインクラー小傳—　麻生武治　〔一八〕

シュプルングラウフの研究續篇　原忠平　〔二〇〕

春の東北朝日岳

露西亞に於けるスキースポーツ　岩森秀夫譯　〔二四〕

彙報抄錄

スキーテクニックの研究　中野誠一　〔1〕

寫眞版

アツモリサウ　岡田喜一

St. Christoph am Arlberg

大正十五年八月發行

アツサモリサウ　　岡田喜一

思出

Erinnerung

— Hans Morgenthaler —

涯しなく氷海（フィルン）の波は續いて、蒼穹への最後の弧を描いてゐた。そして一つ〳〵の新しい波は先驅者の樣にやわらかく輝き、暖かい陽光はその上を廣々と照り渡つてゐた。

見給へ、もう一度振りかへつて！　いかに雪の荒野に陰影多き足跡の殘つてゐるかを。いかにこのあたりの清純な雪の覆ひが粗暴に、亂雜に壞されてゐるかを。……こんなことをした惡者がゐると云ふことが悲しくなつた。

しかしも一度その足跡を最終の氷海（フィルン）の丘まで見送つて見給へ！　……それは藍青色の眞珠の鎖の樣に優しく美しく遠くへ遠くへと續いてゐる。それの一つを一つ一つの段階と見ることが出來るならば、それは小さな階段だ。とけて集り、そして纖細にはられた線を各々の波でうね〳〵させてゐる。そして、最後の氷海（フィルン）の波の脊を靄のかゝつたやはらかな蒼穹にもたげてゐた。

登山史上の人々（一）

ゲオルク・ウインクラー小傳

大島亮吉

ゲオルク・ウインクラー　Georg Winkler (1869—1888)

一八八〇年代に於ける獨墺登山界は今日まで登山史上に其の名を殘して居る多くの俊秀なる登山者の後を繼いで續々と輩出した一の特色ある時代である。我等は先づルドウイツヒ・ノルマン・ネルダ Ludwig Norman-Nerude (1864-1898) ルドウイツヒ・プルツチエラー Ludwig Purtscheller (1849—1900) エミール・ツイグモンディ Emil Zsigmondy (1867—1885) ローベルト・ハンス・シユミツト Robert Hans Schmitt (1870—1899) 及び當時から今日尙ほ現存する人々にギドオ・オイゲン・ランメル Guido Eugen Lammer ヘルマン・デラーゴ Hermann Delago アロイス・ツオツト Alois Zott アルフレツト・ヘツケル Alfred Heckel ヨセフ・イツトリンゲル Josef Ittlinger 其他の名を擧げることが出來る。

以上此等の登山者等はオスト・アルペンのあらゆる雪峯、岩塔に多く自己の名を刻み、又遠くシユワイツエル・アルペンから南佛のドウフィネまでに亘つて不朽の名を多くの峯頭に止めた者もある。然し乍ら此等一八八〇年に於ける獨墺登山者の中に、登山史上恰かも彗星の如く瞬時强烈に顯れて、又忽然消えてしまつた恐るべき、不可解な、謎の登山者があつた。

陽に輝くドロミーテンの針の如く尖鋭な、そして怪奇な岩の塔をば、彼れは實力なき、亂暴な、向ふ見ずな者としてで

はなく、眞に力ある登攀者として最初に攀ぢ登つた。洵に彼れは不朽の名を有する『高處征服者』ein Horstergieger であつた。

『戰慄せずして、誰れか好く人が其の鋭利なる刄のやうな山稜の鋭端にしがみつき、そして其の尖れる山頂まで其れを這ひ攀ぢ、又其れを降り得たと言ふ事實を想像し得ようか？ 嘗て一日、其れは一八八七年のことだが、十八才になる學生である一青年が此の地に來たつて斯やうな企劃を敢えて爲し、然かも其れを試み、單獨にて其の頂に達した。彼れはアルプスに於て最難な登攀の一つである其れを、餘り困難なく爲し遂げた。そして彼れは一語も其れに就いて語らなかつた。唯彼れの小さき手帳の中に、彼れは其の登攀の日附と降りに際して繩が殆んど二つに斷れかゝつて、彼れが僅か繩の二三の股に依つて、漸く支持されたと云ふことを記した覺書を書き込んだばかりであつた。其の翌年此の青年は單獨でワイスホルンを登攀した間に失はれてしまつた。そして其の後、決して再び彼れの姿は見ることは出來ないのである。』(Guido Rey, Peaks and Precipices, scrambles in the Dolomites and Savoy. Eng. trans. by J. E. C. Eaton. 1914. P. 128)

其の彼れこそ、此のゲオルク・ウィンクラーである。此の岩登りと謂ふ登山の上の一つの新しい形式の黎明期に、彼れは宛然太陽の如くに昇つたのである。獨逸の北カルクアルペン (Nördliche Kalkalpen) に、ライロールのカイザーゲビルゲのトーテンキルヒル (Totenkirchl) に、ドロミーテンのファヨレット・テュルメ (Vajolett türme) や、サツス・マオール (Sass Maor) ツヴェルフエルコツフル (Zwölferkofl) にエルステベスタイグングを彼れが爲した記念として、其處にはウインクラーカミン (Winklerkamin) (チマ・デルラ・マドンナにあるもの) ウインクラークーロアール (Winklercouloir) (トーテンキルヒルとカルルシュピツツエの間にある) ウインクラーシャルテ (Winkler Scharte) ウインクラートウルム (Winkler turm) と言ふやうな彼れの名を冠した岩峯、山稜の裂罅、登路として用ひらるゝ山襞がある。

誰れしも、ゲオルク・ウィンクラーの登山の上で爲した事蹟を知つて、全く驚嘆せずには居られないのは、如何に彼れが年少の頃より山を登り、又極く僅かの年月に如何に多くのドロミーテンの峻しい岩塔を攀ぢ、殊に彼れが今日まで知られて居る登山者の中で、最も大膽なアラインゲンガーであり、フエルスクレツテライに掛けての計り知れぬ天才であつた

かと言ふことである。彼れこそ、此れ等の點では、全く他に多くの岩登りで知られた登山者を生んだ一八八〇年代の獨墺の登山界に於てさへも彗星的登山者なのである。

ウインクラーと同時代で有名な登山者として、彼れの又交友であつた者には、同じくフエルスクレッテラーとして知られて居る彼のローベルト・ハンス・シュミツト（Robert Hans Schmitt）があり、Winkler-Zott kamin の名をトーテンキルヒルに止めて居るアロイス・ツオツト（Prof Dr. Alois Zott）があり、今日獨墺登山界の耆宿なるギドオ・オイゲン・ランメル（Prof. Guido Eugen Lammer）がある。殊に此の一八八〇年代に於て、ギドオ・オイゲン・ランメルはウインクラーと並び稱されて『岩ではウインクラー、氷ではランメル』と云はれて居た程の登山者であつた。

ウインクラーの短かき生涯の事蹟は、彼れと同時代の交友の一人であつたエリツヒ・ケーニツヒが、ウインクラーの遺せし日記と手紙と其れに彼れと同時代の交友の寄稿とを集めて編纂した記念的な好著 Empor! (Georg Winklers Tagebuch In Memoriam. Herausgeber Erich König) や、ギドオ・レイの高名な著 Alpinismo acrobatico.1912 (J. E. C. Eaton. Peaks and Precipices. Eng. trans. 1914. Alpinisme acrobatique. traduction francaisepar Emile Gaillard, 1920; Heinrich Erler, Kletterfarten im Montblanggebiet und in den Dolomiten übersetzt im Deutsch. 1925) や、フランツ・ミーベル（Franz Mieberl）の Die Erschliessung des Kaisergebirges. 其他ドロミーテンの登山に關して書かれた諸書中に於て悉く其の多少なりともを散見する。

而し乍ら就中、其の叙事精細詳密を極め、此の謎の、未知數なる岩石登攀の天才の生涯に就いて、幾多の正確なる資料と、髣髴たる其の面影とを我等に傳へしめるものは、言ふまでも無く、エリツヒ・ケーニツヒの編纂せる Empor! の一著である。筆者が是れより以下に誌さんとする所のものは、大部分此の書に依據して、我等が知る限りに於ての、登山界のバーンブレッヒヤー、岩登りの異常な天才、ライデンシヤフトリツヒなアラインゲンガーなるゲオルク・ウインクラーが十九年の短かき生涯を傳へんとするのである。文中エリツヒ・ケーニツヒ以外の諸書よりの引用、並びに同書よりの抄錄引用は一々之れを明記することと爲した。起稿に際して、先づ筆者はエリツヒ・ケーニツヒの勞作に對して、多大なる感

謝と敬意とを表せざるを得ない者である。

ゲオルク・ウインクラーは一八七〇年恐らくミュンヘンに於て生れた。實際に於て筆者の知る限り、彼れの出生の地を明記した記述は、未だ各書の中に發見し得ない。又彼れの幼少の頃に就いても書かれてある記述は全くない。唯だ彼れがミュンヘンのギィムナジゥム Gymnasium の生徒であつた事實から推察して、恐らくミュンヘンの生れであらうと云ふに過ぎないのである。

ウインクラーは此のギムナジイウムの生徒であつた時代に學業の間の休日に、熱心に主としてミュンヘンより近くにあるカイザーゲビルグ、遠くはティローラーアルペン、ドロミーテンの山々に登山を爲したのである。如何に彼れが年少の時から登山したかは彼れ自身の書いた日記に依つて知る事が出來る。又彼れの短かい年月の間に於ける豊富な登山徑歴に就いても、其の悉くを彼れの日記に依つて知るを得るのである。そして此の日記と言ふのは取りも直さず、ウインクラーの死後友人に依つて發見せられたものである。又此の日記は、エリッヒ・ケーニッヒの編纂した Empor!（「登高！」とも譯すべきか）に全部收錄せられてある。其れに就てケーニッヒは恁う書いて居る。「ウインクラーは一八八八年の夏シュワイツに行く直前、彼れは日記体の覺書を誌して、其れに Meine Wanderungen im Hochgebirge－Georg Winkler. と題した」即ち其れが有名な『ゲオルク・ウインクラーの日記』なのである。以下彼れの日記の各部を抄錄して、彼れの登山履歴を誌して見よう。

ウインクラーは一八八〇年、彼れが十一才の時から其の登山の徑歴を初めて居る。然し一八八四年迄は勿論彼れと雖も大なる峯には登つて居ない。彼れの日記に於ても、唯だ其の山名を記して居るのみである。即ち、一八八〇年――Schmittenhöhe (1935m); Kampenwand (ca. 1600m)　一八八三年――Wendelstein (1849m); Bodenschneid (1682m) である。

一八八四年、彼れがミュンヘンのギムナジアートとして最初の年に於て、始めて彼れは獨逸最高の峯ツークシュピッツエ (Zugspitze 2960m) を、夏期休暇の八月十五日より二十二日までに亘つて登りつゝ、アアルベルク (Arlberg) を旅行し

最後はブレゲンツ湖に出で、リンダウ(Lindau)を徑て、ミュンヘンに歸つた。此の一八八四年は未だ餘り彼れの登山徑歷として記するに足らないものであるが、其の翌年の一八八五年から一八八八年迄の四年間は、彼れの最も熱烈に登山した期間である。以上の年月に於ける彼れの登山した山名を記し、重要なものには日記よりの摘記を附して、年月順に掲げるならば、

一八八五年（八年三日より九月五日まで）主としてフォルアアルベルク、ジイルヴレツタグルツペ、カイザーゲビルゲの諸山群の峯に登つて居る。即ち

Trettachspitze (2587m) 八月九日、老シュラウドルフ (Schraudolf) の案内にて、アインエーズバツハより登攀。此の峰の初登頂。は一八五五年、Birgsan の村人に依りて行はれ、老シュラウドルフを連れて最初に登つた登山者は、彼のヘルマン・フォン・バルト (Hermann von Barth) である。

Müdelergabel ((2643m) 八月十日、單獨にてヴルテンベルゲルハウスより登攀。

Fluchthorn (3380m) 八月十六日、案内者、フランツ・エステラー (Franz Oesterer) の案内にて登攀。此の峰はジルヴレツタグルツペ第二の高峰である。

Spitzel (2788m) 八月十七日、單獨にて登攀。

Vordere Jamtalfernerspitze (3169m) 八月二十一日、單獨にて登攀。

Kuchenspitze (3163m) 八月二十五日、第三番目の登頂、旅行者としての第二番目の登頂。Moostal より登る。案内者エステラー・エルステベスタイガーはコンスタンツの Dr. Stranz である。

Piz Buin (3327m) 八月二十八日。案内者エステラーと共に登攀。

Sonneck (2250m) 九月一日。此の日初めてカイザーゲビルゲに足を入れる。クフシュタインの案内者カスパール・ピルクナー (Kaspar Pirkner) の案内にて登攀。

Elmauer Halspitze (2350m) 九月二日。同じくピルクナーと共に登攀。

Aekerlspitze (2331m) 九月三日、ピルクナーと共に登攀。

一八八六年　此の年より彼れは前年の如く夏期休暇のみに登山したのみで無く、四月よりして十二月迄殆んど毎月、近くはカイザーゲビルゲに、遠くは南テイロールのドロミーテンに、テイローラーアルペンに、峻險な岩塔、岩壁を攀ぢ登

つて、初登頂を二つ、新登路の開拓を三つも爲して居る。

フランツ・ニーベルが、カイザーゲビルゲの中に獨墺山岳會（D. u. Oe. Alpenverein）のセクティオン・クフシュタイン（Sektion Kufstein）が建てたヒンテルベーレンバートヒュッテ（Hinterbärenbadhütte）の登山小屋備付帳（Hüttenbuch）の一八八三年より一九〇七年までに到る間の記錄を整理して收錄した Die Erschliessung des Kaisergebirges（1912）の中に計らずも、又私等は、ゲオルク・ウイクラーが、一八八六年に於て其處の岩山に登つた時、彼れの其のヒュッテンブーフの中に書き殘した記錄を見出す事が出來る。

一八八六年四月十八日より二十六日に亘つて、彼れは未だ雪深きカイザーゲビルゲに、此のヒンテルベーレンバードヒュッテを中心として、ナウンシュピッツエ Naunspitze（1641m）ピラミーデンシュピッツエ Pyramidenspitze（2026m）シュトリプゼンコップ Stripsenkopf（1800m）に全く單獨で登攀し、其の二十六日には、今日 Winklercouloir 又は Winkler schlucht と呼ばれて居る Totenkirchl と Karlspitzen との間のクーロアールを攀ぢて、同じく今日 Winklerscharte と呼ばれてゐるトーテンキルヒルとカールシュピッツエの間の裂罅に登つて居る。ウインクラーはヒュッテンブーフに此れ等の日の記錄を極めて簡潔な筆を以つて記して、其の冒頭には、Georg Winkler, Student aus München; Mitglied der D. u. Oe. Cl. = V. Sektion München. と署名して居る。（Ibid. p. 21 s. 9）

六月十二日、ギムナジィウムの夏期休暇が初まると直ぐに、彼れは學友ハンス・フランケ（Hans Franke）と共にミュンヘンを出でて、ティロールのクフシュタインに到り、其處よりヒンテルベーレンバートを訪ね、アウグスベルクから來た山友達のアルトウール・ディートリッヒ（Arthur Dietrich）及びフォン・ファイリッチ（Von Feilitzsch）アロイス・ツオツト（Dr. Alois Zott）との三人と會合し、トーテンキルヒルの登攀の計劃を相談した。そして六月十五日迄トーテンキルヒルの岩山を普く方面より登攀し其後に『ウインクラー・ツオツト・カミン』の名で呼ばれる樣な登路をも殘した。其れから續いて、彼れは南ティロールのドロミーテンの中心に到り、次ぎの樣なドロミーテンの峻險な岩塔を登攀した。即ち彼れが日記より次ぎに抄錄するならば、

Kleineste Zinne (2495m)　八月三日。ツォットと共に登攀。エミール・ツイクモンデイの登攀用地圖を携へた。下降に際して雨に襲はれ、黄色の岩壁の中央にて露營。

Croda da Lago　八月六日。ツォット同行。此の峰は有名なドロミーテンフュウラーとして知られたミケル・インナーコッフラー Michel Innerkofler が一八八四年に初めて頂を究め、ウインクラーの登る迄約七回は踏まれて居た。中央の尖塔の下の狭い帶狀のデブリイの上に、午後八時に露營。

Sass Maor (östlicher Turm 2812m, westlicher Turm 2767m)　初登頂。八月十二日。五・三〇、サッス・マォールの麓のアルペ・サプラロンツイ (Alpe Sapraronzi) を出發。悪い天氣。屢々庇護所に入る。サン・マルチノの谷側のベルクザイテにあるフエルスクーロアールより、頂上の二つの岩塔の間のシャルテに到る登路を求め、一一・一五其の地に達す。一番下の岩壁は難しい。(クレッテルシューエを用ひた) ツォットに從つて、東の岩塔と、西の岩塔との間のシャルテに導くクーロアールを登り、可成りの困難を經て、三・三〇—四・〇〇に西の頂上に達した。ツイグモンデイの地圖携行。美しい展望。シャルテまで登路と同じ途を歸る。五・一五—五・四五。右へ狭い帶狀地、其れから浅いクーロアール、二個所岩壁を登つて、其のクーロアールを、一つの、シュットパント (Schuttband 岩層の境目に帶狀に張り出て、其處にデブリイの積つた所を云ふ。筆者註) 此の西の塔のシュットパントは獨特の個所で、人が登る事は出來ない。一つの岩壁を登つて、パントを左へ行く。其處より二九mの高さある、垂直な、滑らかな、曝露されたカミンを登つた。自分の是迄爲した中で、恐らく最悪のものである。(其れは今日ウインクラーカミンと呼ばれて居る。—編纂者の註) 其のカミンは上に到つて狭くなつて居る。そして大きな斷崖に取り付く爲には、どうしても一つの岩塊を乘り越えて登らなくてはならない。八・〇〇、ツォットが其處を登つて行く跡に從つて、處女峰を踏む。頂上に露營。月光のアドリアチック海。

八月十三日。シュタインマン。出發 六・〇〇。シャルテ、九・三〇—一〇・一五。クーロアールの麓、一二・四五。サプラロンツイ三・一五—四・〇〇。サン・マルチノ、五・四五。

八月十四日。ツォットと別れる。ヴアル・デイ・ローダ (Val di Roda) を徑て、パラグレッチヤーの下に露營。

Pala di San Martino (3243m)　八月十五日　單獨にて登頂。

Cima di Ball (9131ft.)　八月十七日。悪天候。パッソ・デイ・ボール (Passo di Ball 8038ft.) へのシュネーシュルフトより單獨にて登頂。(此峰はパラ・デイ・サンマルチノの南に聳え、從つてプリミエロの谷の東に壯大な姿を以て聳立する。其の名は高名な英國登山者ジョン・ボールの名に因みて附せらる。筆者註)

Hochfeiler (3306m)　八月二十二日。氣樂なミュネーヴンデルング。雪上の足跡に依りて頂上まで導かれた。

Olperer (3480m)　八月二十四日。單獨登山。

Totenkirchl (ca.2050m) 第三番目の登頂。八月二十七日。第二番目の登頂者はツオツトとツアメツツエル。
Vordere Goinger Haltspitze 八月二十八日。新しい降路に依りて下る。
Vordere Karlspitze, Hintere Karlspitze, Fleischbankspitze (第二番目の登頂) 八月二十九日。

此れに依つてウインクラーの夏期休暇の山旅は終つて居る。彼れはドロミーテンへの登山の往路と歸路とに、其の途中であるカイザーゲビルゲに立ち寄り、其處で又記錄的な登攀を爲したのである。

カイザーゲビルゲはウインクラーにとつては、一つのリーブリングスゲビートであつたのであらう。彼れは學業の休暇を利用して、此の年には度々其處を訪れて居る。十月二日より三日まで、彼れが其處を學友のフエルディナント・キルゲル(Ferd. Kilger)とツオツト(Dr. Alois Zott)と訪れた時には、トーテンゼツセルシユピツツエ(Totensesselspitz)の初登頂を爲して居るし、同じく十月三十日より十一月一日まで、學友アルトウール・ディーツ(Arthur Dietz)とトーテンキルヒルに登攀し、十二月二十五日より二十九日迄の基督降誕祭の休暇には、ディーツと共にヒンターベーレンバートの登山小屋に到り、雪厚いカイザーゲビルゲの山々の中で、ナウンシユピツツに登つた他、登山小屋でヒツテンレーベンを味つて樂しく時を過ごして來て居る。

一八八七年には、彼れは又カイザーゲビルゲの他、テイローラーアルペン、ドロミーテンの各グルツペを訪れて、彼の名高いフアヨレツト、テユルメの三つの岩塔の中、第二の高さではあるが、最峻險な岩塔に單獨で登つて、後にウインクラートウルムの名を殘した。

此の年五月二十八日より三十一日まで、例の如くウインクラーはギムナジイウムの學友であり、又常に行を共にして居た山友達のアルトウール・ディーツとカイザーゲビルゲを訪ひ、彼れの愛好せる岩山、トーテンキルヒルを登り三十日にはディールの他に、同じくミユウンヘンの名ある登山者として知られたクリスチアン・シエルホルン(Christian Schöllhorn)と共に、エルマウエルハルトシユピツツエ(Elmauerhaltspitze 2350m)に登つてミユンヘンに歸つた。

八月七日より彼れは又樂しい夏期休暇になるや、何時もの如く、アルトウール・ディツを誘つて、永い冬の間夢に描い

て居たドロミーテンの怪奇な山容の山々を慕つて、ミユンヘンを出發した。

八月八日には先きに五月に登つたエルマウエルハルトシユピツツェをホーエン・ウインケル（Hohen Winkel）よりのツアイテ・ベスタイグングを爲し、其の日の中に Gamshalt, Kleine Halt の頂を究めた。其れから續いて、ドロミーテンの中央に入つて、次ぎのやうな峯々を登つた。

Dreischusterspitze (3160 m. II. Besteigung vom Innerfeld) 八月十六日。單獨にてインナーフエルトより登攀。此の峯のはゼックテンタールドロミーテン（Sextentaldolomiten）第一の高峯で、其の初登攀者はエミール・ツイグモンディである。

Haunold (2940m) 八月十九日。ハインレート（Heinleth）ベルトラム（Bertram）兩氏と共に登攀。

Antelao (ca. 3300m) 八月二十三日。ハインレート、ベルトラム、クラウスの三氏と共に登攀。

Monte Cristallo (3231m) 八月二十六日。案内者シユタベラー（Stabeler）と共に登攀し、コルテイナ（Cortina）に下る。共地にて初めてウイーンの畫家にして、シユミツトカミンよりフユンフインガーシユピツツエの初登攀を爲し、又 Dachsteinsidwand の初登攀者である、名高い登山者のローベルト・ハンス・シユミツト（Robert Hans Schmitt）と知り、直ちにモンテ・ボベナを登る約束をした。そして以後ウインクラーとシユミツトは非常な親交を結ぶことになつた。（編纂者註、シユミツトは一八九九年アフリカにて熱病に依つて沒した。）

Monte Popena (ca. 3200m) 八月二十七日。クリスタルペツスより第二回目の登攀。シユミツトと同行。

Zwölferkofl (3085m) ジイラルバ（Giralba）よりの初登攀。八月二十九日。シユミツトと同行。

Sextener Rotwand (2788m) 九月二日。シユミツトと共に登攀。

Croda rossa (3133m) 九月四日。北東よりシユミツトと共に登攀。

Becco di Mezzodi (2570m) 九月七日。シユミツト同行。

Cima di Canali (2927m) 九月十一日。單獨にて。

Rosetta 九月十二日。

Kleinster der drei Türme von Vajolett (Winklerturm. ca. 2660m) 有名なウインクラートウルムの初登攀。九月十七日此の登攀をウインクラー自身の記述に依つて記してみるならば、「フアヨレツト・タールの一番高い地點にあるアルプヒユツテを出發、六・一五。岩に取り付く、七・三〇。狹いカミンを登つて、最後の小さい尖端の下に達す。二個所岩壁を越える、九・五〇。シユタインマン。展望は美しい。けれども勿論一部分は限られて居る。一〇・三〇出發。岩石が落ちて來て、ザイルを切斷した。クレッテライ

の終り、一・三〇。岩塔は其の山麓より望む時は實に壯大な山貌を呈して、最も尖鋭な頂を造つて居る。ゾヤールの小屋、二・四五三・七、出發。橋を渡つてモーツオンに下る。四・一五。カンヒテルロ、五・四五。アル・モリイーノに宿泊。」と極めて簡單に其の日の登攀の行程を叙して居る。（其の時まで此のウインクラートウルムは無名の岩塔で、唯だに「フアヨレツトの塔」(Vajolettürme) と呼ばれて居た。此のフアヨレツト・テイユルメの三つの岩塔は夫れ夫れ其の初登攀者の名に依つて、最高の塔はドロミーテンフユウラーとして知られたシュタベラーの初めて登つた所より Stabelerturm と呼ばれ、其の次ぎのは此のウインクラートウルムで、最低で、然かも最難の岩塔はヘルマン・デラゴ (Hermann Delago) の登つた所よりして Delagoturm と呼ばれて居る。筆者註）

Monte Rodella (2482m) 九月十八日。單獨にて登攀。ミュンヘンのエミール・ポット博士 (Dr. E. Pott) と會合。此の prof. Dr. Emil Pott は、此の日ウインクラーと會合した時の印象を、編纂者エリツヒ・ケーニツヒに書き送つて居る。其れを次ぎに引用して見るならば、「其の若いゲオルク・ウインクラー。—私が既に彼れとカンヒテルロで會つてから多くの年月は經たが、今日でも彼れを私は眼前に見るやうだ。目立つて擦り切れた、短かい革ズボンを穿いた、オーベルラントの身裝をした、若々しい、フレツシユな、屈强な、そして輕快な、けれど落着いた、謙遜な、温みある彼れの姿と人格を思ひ出さずには居られない。」(Empor l. s. 47 脚註)

Grohmannspitze (3174m) 九月十九日。單獨にて登攀。グローマンシュピツシエはフユンフフインガーシュピツツエに隣接するドロミーテンの名ある岩山である。ウインクラーはカール・シュルツ教授、コンプトン、マルチンの三氏の作製した登攀地圖（クレツテルカルテ）を携へた。

Marmolata (3394m) Vernel (3200m) 九月二十一日。ワインガルト博士 (Dr. Weingart) と其の案内者ルイツジイ・ベルナルドオ (Luigi Bernardo) と同行して登攀。マルモラタはドロミーテンの雄峯である。

Boéspitze (3157m) 九月二十三日。單獨で登る。此のセルラグルツペの最高峰は容易に近づき得る。アラバの谷に下りる。

そして此れにて、ウインクラーはドロミーテンの山々より遠ざかり、ブレンナーパツスを越えて、テイロールの首都インスブルツクに出で、クスシユタインに到つて、又懷しいヒンテルベーレンバートの登山小屋に九月二十五日の夕暮に辿り着いた。九月二十六日、二十七日の二日間は、永いドロミーテンの山旅の疲勞を充分此の彼れの愛好したトーテンキルヒルの山影にあるヒンテルベーレンバートヒユツテに於て慰めた後、九月二十八日の早朝其地を立つて、クフシユタイン、ローゼンハイムを經、ホルツキルヒエンを通つてミユンヘンなる彼れの家に歸つた。（以上 Empor, s. 21-41 に據る）

ウインクラーの自ら書いた彼れの登山の覺書、Meine Wanderungen im Hochgebige. 即ち『ウインクラーの日記』と稱

せらるゝものは此れで終つてゐる。

一八八八年になつてからの彼れに就いての事は、餘り知られて居ない。唯だ彼れが此の年の夏期休暇には多年憧憬して居たシュワイツの大きな雪峯に行く事を計劃して、其れにはミュンヘンに居る學友のディーツの他、アウゲスベルクに居るツォツトと、其れに關して文通して居る事や、ロバアト・ハンス・シュミツトにも、又當時に於て彼れよりはずつと先輩であり、又シュワイツの山岳に詳しい、彼のギイドオ・オイゲン・ランメルにも、彼れの計劃に就いての疑問や參考になる事項を尋ねて居る事が、同じく Empor に收錄された彼れの手紙に據つて知ることが出來る。ウインクラーの最初計劃したのはモン・ブロン・グルツペであつて、ディーツ、ツォツトの三人で行くことにして居た。然れどウインクラはギムナジイウムの試驗の都合で、其の夏期休暇が八月十日か或ひは十五日に延びた爲に其の計劃を棄てるの止むなきに到つたものである事は、ウインクラーが一八八八年七月二日附を以て、ミュンヘンよりウィーンのランメルに宛て書き送つた手紙に依つて知ることが出來る。此處にランメル宛の其の手紙の要旨を抄錄するならば

『親愛なるヘル・ドクトル。此の登山季節に小生は一友人と共にシュワイツの旅行を計劃致しました。けれど、其れは齟齬致しました。小生の休暇は早くとも八月十日か十五日以後でなければ始まりません。（試驗が其んなに長く續くのです。）其の時はもう好い登山の季節は終つて居ます。小生は、其んなに遲れてシュワイツに行つても、尙其の勞に價ひするかどうかと云ふ事を、シュワイツの山のことに詳しい貴兄にお尋ね致します。貴兄こそは其の時分に於ける其地の狀態を好く御存じてせうから。何うか何時頃迄ホツホトウーレンが出來るか、其の最極限の期間を御敎示下さいませんか。小生の二ケ月半の休暇の一部分は既に晩秋に掛つて居るので悲觀して居ます。前以つて貴兄が親しき御通知を感謝しつゝ。

一八八八年七月二日　　ミュンヘン・ゲオルク・ウインクラー拜』

終ひにウインクラーは、以前からの計劃を棄てて、單獨で、八月に爲つてからシュワイツの山旅に赴いた。エリツヒ・ケーニツヒは書いて居る。「一八八八年八月にウインクラーはシュワイツに赴いた。――モンテ・ローザ・オストヴアントの單獨登攀のことが、彼れの胸にはありあり描かれて居た。――私（エリツヒ・ケーニツヒ）は彼れの父の家で、ウインクラーがシオン（Chillon）から彼れの父に宛て寄した葉書の終りには "Euer dankbarer Sohn Georg Winkler" と書いて

あるのを見た。其れから彼れは――一八八八年八月十四日に――（彼れが私に見せた得意のゴイゼルナー・ベルグシュウを履いて）ツィーナル・ロートホルン（Zinal Rothhorn）を登つた。此の峯の最初の單獨登山者である。彼れの畏友ギドオ・ランメルは言つて居る。――一八八八年は非常に悪い年であつた。此の年に試みられたツィーナル・ロートホルンの登山は三度とも困難であつた。そしてウィンクラーのマウンテット Mauntet から試みた登攀は、其時まで行はれなかつた非常に危險な行路の一つであつた。

扨て、次ぎにウィンクラーの爲した登攀はワイスホルンである。然も其れはグラートからではなく、直接にツィーナル側のラヴィネンヴァントから決行した。其れは彼れの山との最後の爭鬪であつた。

一八八八年八月十六日、朝日はワイスホルンを輝かした。其の時ウィンクラーは彼れの最後の泊り場所であつた或る小さな牧場小屋（アルムヒュッテ）を出發して、彼の英國の登山者ジョン・パーシイ・ファーラー（John Percy Farrar）がケーデルバッヒエル（Köderbacher）と五年前の一八八三年に露營して、危ふくも命を取り止めることの出來た山側を登つて行つた。そして其のヴァントが終ひにウィンクラーの墓石となつてしまつたのである。――

恐らく、彼れの登り行く時、ワイスホルンのフィルンは、日に輝いて居たであらう。そして其の時、谿谷に轟いた雪崩が此の强者を埋めてしまつたのであらう。今尙、ウィンクラーは、此の勇ましきアルプスの騎士は、確かに足にシュタイクアイゼンを付け、そして恐らくはミュンヘンの武具鍛冶が打つたピッケルをば手にした儘、其處に氷に閉されつゝ、彼れのウィンクラートウルムを夢みつゝ、雪崩の消え、彼れに新しい日の出の來る日まで横つて居よう。」（Emporl s. 49）

以上がウィンクラーの登山徑歷の總べてである。此れよりウィンクラー自身に就いて少しく記することゝしよう。

一八八八年ウィンクラーの死んだ年、彼れはギムナジウムの五年生であつた。此の若くして、惜むべく死した登山界の天才の、然も死したる同年、彼れに弟が生れた。此の弟が又人心を衝動するやうな單獨登山を決行したと言ふ事である。

（Arnold Lunn, The alps. Home University Library No. 91. 1914 PP. 197）

ウィンクラーが如何にフェルスクレッテライに於て天禀の才を有して居たかは、彼れの登山徑歷を一覽しても大略想像

することが出來るが、尙其れに就いて二三彼れの此の方面に就いて他の登山者の言つた記述を引證して見ると、彼れと一八八七年の夏にドロミーテンの雄峰の數々を共に登攀した、有名なるクレッテラーのローバアト・ハンス・シュミットさへ、彼れに就いての眞實を吐露して、『私はもう此の以上ウィンクラーと一緒には行かない。――彼れは私に取つては餘り大膽過ぎるから。』と言つて居る。(Empor! S. 15 ケーニッヒのウィンクラーのビオグラフィ)

トーテンキルヒルのウィンクラーカミンは、ウィンクラーが單獨で登攀した時、其の最上部の悉塲を十五分で登攀したと、彼れ自身ヒンテルペーレンバートヒュッテの登山小屋備付帳に記して來て居るが、今日如何なるクレッテルバルティも、ウィンクラーの登攀したと等しい時間に於て登攀し得ないと、フランツ・ニーベルは記して居る。(Franz Nieberl, Aus den Hüttenbüchern von Hinterbärenbad. s, 23) 又ウィンクラーは當時に於て最も有名なドロミーテンフューラーであり、第一位のフエルゼンフユウラーであつた。ゼックステンタールのミケル・インナーコフラー(Michel Innerkofler)と同じ樣に並稱され、『當時の旅行者の中のミケル・インナーコフラー』(Der damalige Michel Innerkofler unter den Touristen.) とエリッヒ・ケーニッヒは書いて居る。岩登りに掛けては、此のインナコフラーとウィンクラーは當時確かに斷然頭角を拔いて居た。そして共に此のフエルスクレッテラーは氷の上で命を失つて居る。即ち一八八七年九月三日ウィンクラーとインナーコフラーとが、ゼクステンで出會つてから一年を出でずして、而も一週間の隔りなく、一八八八年八月十六日ウィンクラーはツエルマットの氷の峯で、インナーコフラーは八月二十日はコルティナドロミーテン(Cortina-dolomiten)の雄峯モンテ・クリスタルロ(Monte Cristallo)で墜死して、其の光榮ある登山徑歷を終つて居る。

ウィンクラーが熱烈なアラインゲンガーであつた事實は、其の登山徑歷に依つても知ることが出來るが、然し彼れの其のアラインゲーエンに對する考想は、當時彼れの先輩であつたギドオ・オイゲン・ランメルより或る程度まで影響を受けて居ることは充分推察し得ることである。エリッヒ・ケーニッヒはウィンクラーが彼れに嘗て『ランメルは何故一人でワイスホルンに行つたのか?』と尋ねた事があつたと書いて居るが、確かにウィンクラーは此の點ではランメルの感化を蒙り、又一八八〇年代にランメルの此のアラインゲーエンやフユウラーローズ・ベスタイグングに就いての論文 Führerloses

Alleingehen im Hochgebirge (Mitteilungen 1884, s. 284 Jungborn. s. 180 1928) の如きを讀んで影響せられて居るものと筆者には思はれる。慥かにランメルは當時に於て極端な登山の上の理想を强調した。强烈な精神を有した登山界のニイチエであり、ウインクラーはそれに對しての最も大膽な、實行的な無條件の肯定者であつた。又此れ以外に彼のヘンマン・フライヘルン・フオン・バルトの著 Aus den nördliche Kalkalpen (筆者註。附記參照) が既に多くの若い登高心を灰色の寂しい岩の巨人に對して燃え立たせたのであつたが、ウィンクラーにとつても、其れは同樣であつた。其れから又エミール・ツイクモンデイの Im Hochgebirge もそうであつた。ウインクラーは、若し彼れのより長く生きて居たとしたならば、彼れこそノルトアルペンの寂しき星であつたヘルマン・ヘライヘルン・フオン・バルトと、ヨーロッパ大陸に於けるアルピニスムスの典型的な、理想的な鬪士であるエミール、ツイクモンデイの立派な後繼となつたであらうことはエリッヒケーニッヒの誌して居る所である。

一八八〇年代に獨墺登山界に輩出した多くの錚々たる登山者の中若くして皆山の爲めに多くは其の生命を落して居る。そして此れ等の獨墺の登山者は皆ドロミーテン、北カルクアルペン等でフエルスクレッテライのテクニックを養つて居るので、フエルスベルクに對しては非常に自信を有して居たが、然れど結局、彼のドロミーテンの岩の荒野に聳え立つ、幾多の魁偉な山城の樣な、或ひはゴシック寺院の樣な、又は細い高層建築の樣な、マホメット寺院の尖塔の樣な峯々の一つ一つが、彼れ等の名を永久に記念する、眞に最適の墓碑でないものはないと言はれて居るのである。そして其の中又殊に彼のウインクラートウルムの如きは其の最も顯著なものと云ふべきである。ギドオ・レイは記して居る。「ウインクラーは決して彼れの考想を發表はしなかつた。彼れは彼れの愛せし山々の如く、沈默せる神話として止まつたのである。そして彼れに對する記憶は彼れの熱烈な情熱の處女的な神秘の保存よりも、より純潔なものである。彼れは全く知られずして終つた。然し彼れの攀ぢ登つた岩の塔は今は彼れの名を冠せられて、太陽の下、雲の中高くに聳えて居る。其れは不屈不撓の意志の象徵であり、人の築き能ふ如何なるものよりも價値あり、より印象的なる一個の記念碑である。」(Guido Rey, Peaks and Precipices. P. 128)

(此稿完)

筆者附記

此のゲオルク・ウインクラーの小傳は、本來廣汎なる登山史の一小部分として誌されしものである。其故可能的彼れが短生涯の全部に亘りて一般的に之れを誌すに努め、其の興味深き彼れに對する山友達交友の回顧追憶よりなる記述並びにウインクラー自身の交友に宛てたる書簡等は之れを割愛するの止むを得なかつた次第である。其故此の小稿に於てはウインクラーがより個人的生涯を傳えるには甚だ不充分である事に讀者諸君の留意せられん事を願ふ。尚ほ又筆者はオストアルペンに關する文献に就きては其の知る所甚だ狹小なる範圍に止まり、且つ又有效なる參考文献を知るも、實際に其れ等を入手し難き狀況にあれば、勿論此の小稿中に引用參考せし文献を以て充分事足れりしと爲さゞるものである。

然し乍らゲオルク・ウインクラーの生涯を傳えて最も遺憾無きものは勿論此稿の大部分が依據せる "Empor! Georg Winkers Tagebuch. Ein Reigen von Bergfahrten hervorragender Alpinisten von heute." (Herausgeber: Erich König, Verlag Grethlein: Leipzig, 1906) である事は既に筆者の改めて此處に確言する迄も無き事である。筆者のゲオルク・ウインクラーの小傳を筆にせんとの意圖又此書を入手するに於て始めて發したる程である。他の諸書は單に彼れの生涯に對して挿話的斷片を傳ふるのみである。

筆者の此の一登山者の生涯に對する興味と知識の必要は、主として彼れが敢爲なる單獨登山を如何なる意圖と原因より決行せるかと云ふ一事より發して居る。然して多少詳細に彼れの生涯の事蹟を知るに及んで、又該方面に於ける彼れが性行の一端をも知るを得たるも、本稿固より其れに筆を及ぼす事は故意に此れを回避せるに努めた。其れ勿論此の小稿本來の目的ではないからである。筆者は頃日筆者自身非常の興味と好奇心とを以て些か其の事蹟を探究しつゝありし一登山者に就て、曾へ其の外形的に過ぎざる生涯を傳えるに止まりたるにもせよ、其れに關して若干の記述を爲し得たる事ば、自ら以て充分滿足とする所である。

Empor! 以外此の小稿に參考せる諸書は甚だ少數にて總べて本文中に其の書名出所を明らかにした。然し乍ら以上の諸書以外現在筆者はウインクラーの事蹟を多少なりとも長く叙した文献を知らぬ。

尚本文中に出づる彼れに關係ありし其れ以前又は同時代の登山者並びに彼れの登攀せしドロミーテンの諸峰に就ての詳細を併記する事は極めて必要にして、又彼れをよりよく了解するに甚だ便なりと思惟せしも、餘りに註記を本文中に多く挿入するは、讀者の不便と筆者自身の勞の多大を思ふて、極めて重要なる少數に制限した。其故ウインクラーが單獨にて容易に登攀せしドロミーテン各群の諸峰並びにジイルヴレツタ山群、獨逸北カルクアルペン等の峰頂が如何なる程度に今日にても困難を要し、且つ尚今以て多大なる登攀技術を要するものなるかを知る事は右を以ては不充分である。該事項に關して意ある讀者は今日出版せられある同諸峰に關しての專門的登山案内書として左の二書を參讀せられよ。

1. Purtscheller-Hess; Der Hochtourist in den Ostalpen. 第一版一八九四年二卷、第三版一九〇三年三卷 (Leipzig u. Wien.) 第五版新版一九二五年 Hans Barth の編纂にて八卷に分ちて發行の豫定。此書はオストアルペンに關する最良の登山案内書である。

2 John Ball's Alpine Guides, The Eastern Alps.

尙ほイースタン・アルプスの各小山群に就ての登山案内書も數多あれど此處には唯だ全体的に亘れるものゝみに止むる事とした。又ウインクラーと生前關係ありし登山者に就てはギドオ・オイゲン・ランメルのみが主として今日でも知られて居る。ローベルト・ハンス・シュミツトに關しての纏りたる文献は存しない。ランメルには彼れの敢爲なる單獨登山者としてフユウラーローゼン、各種登山術、登山記錄、登山思想に關しての考想其他に就て長い異常に豊かな生涯に於て到達した結束的、總括的著作である Jungborn Bergfahrten und Höhengedanken eines einsamen Pfadsuchers. (1921. München) が墺太利山岳會の名に依つて上梓された。

尙其れ以上にウインクラーと關係ありし登山者に就きては簡單に纏りて參照すべき文献は現在ない。又其れを擧ぐるの必要もないであらう。然し就中餘り吾人に迄知られざるは彼のヘルマン・フライヘルン・フオン・バルト (Hermann Freiherrn von Barth 1845-1876) であらう。彼れは一八六〇年代より七〇年に於ける獨逸に於ける大なる登山史上の開路者として、又登山に關する其の著述に於て重大な意義ある仕事と獨特の境地を開いたので知られたる獨自の登山者である。彼れの名は今日オストアルペンの峰頂、登山小屋、登山路、登攀路に附せられて永遠のものである。彼れはオストアルペンの登山者と共にアフリカ探險者であつた。オストアルペンの中主として彼れは其の北部の諸山地に足跡を普ねくした。其の著書には左の如きものがある。

Aus den nördlichen Kalkalpen

Wegweisers in den Voralpen (1838)

Ersteigungslinien

彼れの著書がツイクモンデイの其れと共にウインクラーの愛讀を蒙つた事は言ふ迄もない。

終尾に於て附言したい一事は筆者の嘗て譯出せるオスカア・エリツヒ・マイヤーの Tat und Traum (1920) の冠章『二人者』Die Beiden (登高行第五年所載) 中に於て描かれたる前者の山にて死せる一青年こそは此のゲオルク・ウインクラーを意想せるものであつた事である。

* * * * * * * * *

シユプルングラウフの研究續編

在伯林　麻生武治

美的要素を多分に必要條件とするシユプルングラウフの空中に於けるシユティルは、大膽と熟練の複合であることは前にも云つたことである。

扨てその熟練と云ふ點に就いて、腰を屈したシユティルと然らざる足先から頭のテツペン迄眞直なシユティルと、その何れをより美しいとするかは六敷しい。

なに Carlsen の型が古くて Thams のが新しい、そんなことは云へない。然して新必ずしもよしとせず、Carlsen のあの胸を思ひきり突き出し、頸から頭を高く保つた立派なシユティルをどうして古いなどと云へようか。

Thams の腰を屈げたシユティルにしてもシャンツエの端を離れる時は、矢張り眞直にして躍出し、着陸斜面の傾斜に應じて腰を折つてより多くの Vorlage（前傾姿勢）を加減するのは、何も Thams に限つてやるわけじやない。

從つて同一のシユプリンゲルだつていつも同じシユティルで跳ぶとはきまつちやいない。

兩の手の廻轉にしてもそうだ。その運動に依つて Vorlage を支配するといふのも、シユプルングラウフ中の重要なテヒニークじやないか。

Carlsen に依り多くの熟練があり、Thams に依り大膽さがあると云へるかも知れない。それもすべての事情が同じで、同時に同じ場所で跳んだと云ふ時の比較でなければ云々するのはちと早計だ。

審判者にしたつて今のは大膽さが缺けてゐたから何點引くのなんてことはしない。アプローチから圏外で停止するまでのシユプリンゲルの運動の調和を見て二十點から減點

St. Christoph am Arlberg

をするのである。

獨逸の聯盟などじや大体悪い。アプローチで一乃至二點踏切りで一乃至五點、空中の姿勢で一乃至八點、着陸の不安定なのが一乃至四點、それに着陸での轉倒はその時及び其處の狀況に依つて、一乃至二點の減點をすることになつてゐるのであつて、Bayerisches Ski Verband の Gruber 教授、Bregenz の Victor Sohm 氏、Tirol の Schneider 氏、Bern の Björnstad 氏、Poutresina の Wally 氏等一流の審判者に聞いたが、略々同樣の意見を持つて居られた。つまりシユプルングラウフの根本的の條件が頭にあつて、それに多くの實際の經驗を持つた審判者の感覺によつて採點されるのが、一番競技者にとつて公平であり、愉快ではなからうか。

スカンヂナビヤは無論だらうが瑞、墺、獨の諸國では、皆經驗のある人達が審判者をやつてゐる。

新しいシャンツエのシャンツエ開きには、たとへ遠くへ跳べないでも、まづ審判者自ら跳ぶのを見ることさへある、まして自分で跳んでも見たことのない人が、アプローチのスタートの位置などを指定したり、大膽さ、熟練さの感じなどがわかる筈であらうか。それらは物理でも。教學でもないのだ。スポーツは實際に於て生きるのである。

（完）

寫眞說明

「アツモリサウ」學名 Cypri Pedium macranthon, Sw. 山地に生ずる多年草本で、莖の高さ一尺位、卵圓にして尖鋭なる四五枚の葉が莖を抱いて互生してゐる。花期は五六月で（小生は七月下旬北荒川岳にて開花せるを見たことがある）莖頂に一花を開くものである。花の色は紅紫色が普通だが寫眞に寫れるものは純白花のもので富士山麓にて撮影せられたとのことである。特に「キバナアツモリサウ」と云ふは稀有のもので北海道にては雄冬にあると稱せられてゐる。（健）

St. Christoph am Arlberg はチロールより伯林へ歸られた麻生武治氏より贈られたもので、裏面には次の樣に說明が書かれてありました。

墺國文部省直轄スキー學校のある St. Christoph am Arlberg 1800m.ü.M 塔のある建物が昔の僧院（Hospiz）今は宿屋、手前のが學校なり。而して右手にあるは Hospiz の附屬家。

何と氣持のよい雪と、豊富なる斜面を持つた所ではありませんか。（健）

春の東北朝日岳

原　忠　平

一行　土井壯太郎、原忠平

丁度私が住みなれた都を離れて北海道へ來た時、春四月と言うのに猛烈に多量の雪をその山肌にまとうてゐた東北の山々、それはその長い汽車旅の間に最初に眺めた爲か深く深く印象に殘つてゐた。そうして幾度かその間を往復してゆく間に　何んとも言へない親しさと輝きとをこの東北の山々に持つ樣になつた。そうして友達の語を聞いたり、その山旅の紀行を讀むだりして行く間にこの思ひは一層濃く厚くなつて行つた。

鮎貝の狹い驛に私達二人の姿を見出したのは、その翌年の四月の中旬の事だつた。

空はどんより曇つて頭殿山から大萩森山にかけて盛んに雲が飛んで行く。春とは思はれない凍つた冷たい風が横頰を掠めて行く。一種の小さな不安と緊張味とを感じながら驛前の古川氏の家に落付いた。この古川政次氏は朝日鑛泉の主人で冬の間は鮎貝の町に下りて居るのである。深切に沸してくれた湯に入つてから、のんびりした氣持で煙草を薫らしながら、山の事を聞いたり、計畫について相談する雪質は堅くて歩行は自由、又雪崩の心配も少いさうだが、今年の氣候は大變おくれてゐて、昨日も山は吹雪いたさうである。

明日の天氣を心配しながら床についたのは九時過ぎだつた。

四月十六日　快晴

早朝二階の窓より眺めると昨日とは打つて變つて美しく晴れてゐる。朝の陽光を全容に受けて輝き映ゆる白銀の山

波は物凄く、透明なる大氣をついて屹立してゐるではないか！心より迸り出る歡喜をどうする事も出來ない。

古川氏夫妻に送られて鮎貝を出發したのは六時少し過ぎ立派な街道を行く、實淵川の流れを渡つて少し登ると尖山頭殿山を後に日影の村が目の下に眺められる。この村は實に感じの良い平和な山村を思はせるに充分である。白壁の家が約十四五軒ばかりあつて、その眞中にある一番大きな家がこの古川氏の奥さんの里ださうだ。其上なほ良い事は暖日山から尖山のスロープは實にスキーには好適地らしい雪質も猛烈良いさうだから五色温泉あたりで滑る位なら、この平和な日影村の叔母さんの家に泊めてもらつて近くの山へ登つたり、その邊のスロープで練習した方がどんなに氣持が良いか解りはしないだらう。（この山旅が終つて歸途古川氏の家によつた時も是非スキーを持つて遊びに來てくれとの話だつた。）

頭殿山を越して朝日鑛泉に下るのは雪のある冬の間は地圖に記してある夏徑を通らないで郡境線にほとんど從つて登つてゐる。そうしてこの間實淵川に面する斜面に小さいが數々所の崩雪の跡を見立した。

瘠尾根を渡つて少し登ると頭殿山につく。こゝは又猛烈に眺望の良い所だ。あの強烈な春の陽光の下に銀色に輝く朝日連山より月山に續く美しい峯々に全く私達は、吸込まるゝ樣に見入つた。藏王山から舟形山の方面も驚く位多量の銀雪を戴いて聳えてゐる。何時まで眺めてもあきることを知らない。陽光は益々强烈に、大氣は益々透明に、そうして英峯はいやましに壯嚴に輝く。

浴客らしい男とその案内者らしい男と、この頂きで會つた。浴客はこの峠を越して町に下るのであらう。案内者はその人を送つてこの峠まで來たのだ。こうした山奥の鑛泉に雪を分けて湯に入りに來る人の心を思ふと、一種の淋しさと人間性の力强さとを感じざるを得ない。暫らく休むで私達は浴客と別れて、この猛烈に美しい眺望を持つ頂きを後に鑛泉へと下つて行く。郡境と別れて美しい潤葉樹林を下つて行くと目の下に朝日川が白く光り出した。それが段々と近づいて、やがて鑛泉の家根もはつきりと見出される樣になつた。

それから間もなく私達はこの鑛泉の浴室、と言つても穢いものではあるが、その一隅に疲れた骨節を長くのばした夜は星夜であつた。谷川の深れがごう〳〵聞える。

最初私達の計畫は第一日は朝日川を登つて、二俱の小屋

（新設）に荷を置いて大朝日岳から西朝日岳に登り、其日は二俣の小屋に泊つて、第二日に小朝日岳と鳥原山の鞍部に出て小朝日岳に登り、引歸して鳥原山から朝日鑛泉に下る豫定だつた。しかし鑛泉にゐる古川（政治氏の從兄弟）の話によるミ、天氣は晴れてはゐるが、一本當に定つたものではないと言うんで、一日で鳥原山から小朝日岳、大朝日岳に登つて二俣に下り鑛泉に至る行程を取る事にした。

明日のサンドウイッチと紅茶を用意して、樂しい山歩きの一日を思ひながら眠りに入る。

十七日　晴後曇

谷川に面した鑛泉の一夜は明けた。昨夜は星が出てゐたが、それでも本當の天氣ではないと言うんで、相當氣にしてゐた天氣も申分なくよく晴れて、早朝の陽光が樹林の間より朗に差込むでゐる。

六時半、鑛泉の留守をあづかつてゐる古川の案内に、やつぱりこの鑛泉に泊つて獵をして遊んでゐる青年も一所に出發する。鑛泉の右手の急傾斜を登つて大きな立木の間をグングン進む。左手に御影森山から平岩山に續く尾根が眞白に光る。赤山（九九二）の三角點の邊に着いたのは八時半、見ると玲瓏たる朝日連峰は透明なる大氣をついて嚴肅に壯大に屹立してゐる。小朝日岳の南面の峻直に黑俣澤に落ち込むでゐる急崖は眞黑に物凄く露出して聳え立つてゐる。暫く休むで又歩き初める。一度小澤に下つてダラ〳〵登りに櫟と落葉松の疎林の間を登るミ鳥原山のやゝ廣い、ひらけた所に出る。朝日神社がある。こゝで中食をつめ込む（十時二十分）神社は一坪位の大さで、その大部分は雪面上に出てゐる。充分ではないが春の日なら、この神社を借りて一夜を明す事は出來るであらう。

約十一時鳥原山の頂上につく。こゝより小朝日岳に續く雪陵は北面に大きな雪庇をなしてゐる。大朝日岳から以東ケ岳に續く尾根は純白に輝き、遠く赤見堂岳を經て月山に續いてゐる。美しい美しい山波が幾重か重なつて、遠く女性的な月山は長くその山裾を引いてゐる。春四月この雪陵の縱走はさぞかし面白い事だらう。この美しい眺望に全く私達は心を奪はれて、しらず〳〵の間に足は運んで小朝日岳の急峻な登りに取かゝつた。雪が相當堅くなつたので私達はシュタイグアイゼンをはいて、ステップを切つて登る黑俣澤の溪谷は足下に、そうして時折起る雪崩の音が谷間に遠く反響する。

十二時十分小朝日岳の頂上につく。大朝日岳のドッシリ

さした山容ももう目の前になつて來た。風當りの強い爲か頂上の小祠近邊二三坪ばかり松が出てゐる。苔桃のやはらかい苗の上で煙草を薫らす。靜かな靜かなこの山頂に私達は心からの喜びにしたつた。じーつと眺めてゐるとこの清淨の大氣と純白の雪峰と自分の魂とがほーつと一緒になつて溶け込むで行く樣な氣がする。ふと私は眼前に幸福の二字を見出した。都會の複雜もない。人生の苦惱もない。光明と單一と至純とに輝いてゐると言つたM氏の言葉が浮んで來た。それは寒氣と吹雪をついて登高し、絕頂を極めてその一時、霧間より眺め得た蒼氷の峻峰の骨をさす樣な歡喜はないにしても、この春光を全身に受けて、やわらかい苔を苗に送る一時は私にとつては至上の幸福である。私は又登高行に出てゐた二人者と題した譯章を思ひ出した。そうして自分を考へた。何とも言へない喜びがあふれ出て來た。

サンドウィッチと紅茶をつめ込んで頂を下り初めた。小朝日岳の物凄い急崖を振歸つては眺め、振歸つては眺めて行く。午後に至つてやうやく風が強くなり初め、月山あたりにかけて暗雲が動き出す、風は段々強くなる樣子だ。

大朝日岳に二時半着く、樂しみにしてゐた飯豊山方向の眺望は雲霧の爲全くさへぎられてしまつた。北面の雪庇の下で強風をさけて暫らく憩ふ。今朝から登つて來た鳥原山から小朝日岳の尾根、それから今下らうとしてゐる二俣の尾根、その間に黑俣澤が深くくひ込むでゐる。朝日川が一目に見える。三時少し過ぎこのなつかしい山頂を辭して私達は下り初めた。大きな樺の疎林を行く、兎の足跡をおひかけ、おひかけ走る樣に下つて行く。四時半二俣の小屋に着く。雪溶けの綺麗な冷い水の流れで喉をうるほし、汗を流してとある倒木に腰をおろし、私達は靜かな憩を求めた暗雲は蒼空をすつかりおほひかくして、今にもチラ〳〵やつて來さうになつて來た。二俣の小屋は伐採小屋を修理したものらしく、不完全のものだが未だ新しいから、この先五六年は充分用へるであらう。この二俣の尾根にも新しく夏徑が出來たさうである。春だとは言へ日が蔭つて夕暮に近づくと急に寒くなつて來た。雪も大分かたまつたので、私達は朝日澤を下り初めた。黑俣澤と朝日俣澤の水を集めて溪谷は物凄い響を立てゝ流れて行く。私達は思ひ出深いこの樂しい一日の山歩きの平和な疲勞に心地良く醉いながら、そうして鑛泉へと徑をたどつた。

六時半鑛泉に着く。

その翌日なつかしい頭殿山のこの峠を越して雨に打たれながら長い街道を鮎貝へといそいでゐた。山落しに冷たい風が吹いてくる。今頃はあの朝日連峰は前日の和かさはその蔭もなく、自然の偉大な力の爲に暴れ狂ふてゐる事であらう。

露西亞に於けるスキース。ポーツ

(Von Carl Peters, Charlottenburg)

— Der Winter 19 Jahrgang 1925/26 Heft Nr. 4 より —

岩森秀夫譯

スキーに對して非常に澤山の北又は北方亞細亞の言葉でそれぞれ特有な定義が下されて居る。それはスキーが最も古い時代から各地方の言葉で固有の名稱が附せられて居た之等地方民の用具であつたと云ふことを立證するものである。吾人が露西亞に於けるスキーの語源を知らんとするならば言語の歴史に溯らなければならない。

露西亞語でスキーを "lyschy" と云慣はされて來てゐる。之は "lysaj" と云ふ語から出たものであつて跳ぶとか滑走するとか平滑にすると云ふ意味である。"Sich aus dem Staube machen" と云ふことを露西亞の諺で "Nawostrij lyschy" と云ふが之は "Den Scheeschuh spitzen" と云ふ意味である。

露西亞に於て昔からスキーを奬勵したと云ふ事實は凡ての隣國スウエーデン、ノールウエー、フインランドと同樣であつた。そして之によつて共に雪の多い冬期にがらうじて交易に必要なる道路を維持し且又高價な毛皮を取る獸とか非常に美味な冬の野獸の狩獵に用ひられたのである。

昔も今も之等北方人に取つてスキー滑走は決してスポーツではなくむしろ野獸を屠つては彼等の職業を遂行するために月餘に渡る野營を行ひながら起伏ある荒れた雪の野を

彷徨することを可能ならしめる唯一のものである。牧師、官吏、郵便夫、商人、狩人から男、女、子供に至るまで皆冬にはスキーをはく、吾々が靴を所有して居る樣に各人がスキーを所有して居る。

一五五〇年頃所謂暴君ヨハン四世によつてスキーが露西亞の軍隊に取入れられた。其スキー隊はプレスコウ市の奪略に際して比類なき働きを遂行したのである。同市は自由都市の一つであつてナルバ、レバル、リガと同樣北方の同盟に加はつて居た。絕對專政的な皇帝は西方國境近くに市民の共和政體の存續することは彼の東洋的な嚴密さで其部下を取扱はんとする意向に對して危險であると看取したのである。湖沼によつて遮ぎられたる地方では戰爭は冬のみ可能である。第一回の侵略は同盟都市の商人達がスキー隊を處理して居た爲に失敗に歸した。尙翌年再びヨハンはスキーをはいた一隊を率いてプレスコウの城壁の下に現れたかくて其都市に侵入し之を奪略して長く露西亞に讓渡せしめた。此時以來幅の廣いワルドスキー（Waldski）はプレスコウスキーと呼ばるゝに至つた。

此時以來スキーは軍隊に有り來りのものとなりピーター大帝（1672）のメーメル及び白海に至る西北境の領土擴張は此のスキー隊に負ふところ甚だ大であつた。すべて此地方は沼澤の爲に冬の間のみ踏込むことが出來る。それは雪が平に此の地方を覆ひ通行が出來る樣に形成されるからである。

露西亞とフインランドの競泳者のお互の交渉によつてスキー滑走が先づフインランドの國境近くにあつて、ピーター大帝によりフインランドの土地に建設せられたペテルスブウルクに於てスポーツの一分派として認められた後漸く一八八〇年頃スキーがスポーツとして露西亞に於て認めらるゝに至つた。フインランドでは已に五十年前よりスポーツ中に結合されて活動して居た。Petersburg, Narvas, Zarskoje Selo, Wyborg, Helsingfors, Abo, Tammerfors 等のスキー倶樂部は一致してスキー競技大會を計畫したのである。そしてスキージャムプと長距離競爭に常に月桂冠を獲得し居たのはフインランド側であつた。

ペテルスブルグは當時、露西亞のスキースポーツの首位を占めて居た。其處にコンスタンチンコメツ（Konstantin Komets）なる人の居たことを忘れてはならぬ。彼は彼の自由な身をスキースポーツの爲に捧げたのである。彼は大小のスキー倶樂部を設立し、スキー競技會を開催し倶樂部及

び競技の規約を制定し、新聞紙には常にスキースポーツに關する新記事を供し、フインランドのスキー術より大に取入れるところがあり、所々にスキー販賣所を設け又各地の黨員との連絡を計る等種々なる仕事に盡力したのである。彼はスキー統一の仕事に奔走し而も亦彼自身優れたるスキーヤーであつた。又五ケ國語に通じかくて彼の指導は露西亞のスキースポーツに大なる貢献があつた。

更にスキースポーツに百花絢爛の時代を劃したのはモスコー人ピーター兄弟が一〇〇〇人を有する乘輪倶樂部に於ける又新聞社に對する彼等の地位によつてスキーに新しき道を開かんと努力した時である。

一八九五年には "Cyclist" 紙の記者なるカールピーター、(Carl Peters)及びA.=R.=Union の組合長ウイルヘルムピーター(Wilhelm Peters)がコメツとの文書交換をなしモスコーにスキースポーツを植付けたのである。コメツはモスコーに二三年間乘輪倶樂部に一室を設けてスキー指導の爲に止まつて居た。已に第一年にはスキー愛好者が非常に多くなり爲に新き組織を眞面目に考究しそれを片付けなければならなくなつた。それで一九〇〇年にはスキー愛好者によつて成るモスコースキー倶樂部及附近のスキーに熱心なる都市 Tula, Orel, Serpuchow, Twer, Wologda, 等にスキー倶樂部が相次いで設立された。ウォルデマーピーター(Woldemar Peters)はモスコースキー倶樂部の秘書として一九一四年幽閉に會ふまで彼の事務的の手腕を大に奮つた。彼は一九二〇年民事上の罪人として獄死した。ルドルフピーター(Rudolb Peters)は數回に亘る選手權保持者であつた優れたる統治者にして且スキー案内の著者なるモスコー人ポールロヴリヤコフ(Poul Roslijakow)も現れた。カールピーターが彼の住居をエカテリンスブルグに變へた時彼は又其處にスキー倶樂部を設立し其處では彼の仲間のロバートストロール(Robert Stroh)が長い間監督しウラル及び西部シベリヤのスキースポーツの開發に盡力した。

ウイルヘルムピーターは一九〇三年にカルコウに移住しそこで彼はスキースポーツの地盤をウクライナの地方に築いた。次いで露西亞に於けるスキー聯盟の設立が企てられ之に對してはベルリンにあつたマックスシュナイグー(Max Schneider)の提案は最もよるべきところの多いものであつたが不幸此企ては何等の結果を見ずに終つた。歐洲大戰亂の勃發した爲でピーター一家は幽閉せられ、此の着手されかゝつた仕事は遂に中止せらるゝに至つたのであ

る。一九一七年露西亞の瓦解が起り人民に支配權が移つた。之が爲マルクス主義によつてスキーは勿論總てのスポーツ用の器具を政府のものとして發表した。從てスポーツの活動も結紮せられて了つた。

一九二三年の始め家事上の構成が定まつた時スポーツに關しても亦一考せられた。然し事實組織上の各自の意見の表示と云ふものは悉く社會主義的國家の原子に支配せられ之によつて彼等の自由は猿の檻に閉ぢ込められて了つた如くになつたのである。かくて露西亞のスポーツは統一せられ而も體育の一手段に歸せられ其の頭には衞生局の理事ニコライセマスコフが長官として立つた。

近頃更に國家の體育方面の官廳はスキースポーツに大なる興味を持つに至つた。之は露西亞に於てスキー滑走の時期は實に五ケ月から六ケ月の長きに亘り而もスキーによつて體育奬勵の効果が認められたからで加ふるにスキーは露西亞に於て產出される最も安價な器具であるだから自轉車の場合に於ける如く外國から手に入れる必要がなく且又非常に重要なものが安價で手に入る何となれば勞農政府が奬勵するものは特別の手段で用意しなければならない樣になつて居るからである。之に依つて殆ど補助なしに立派な器具で運動が出來又面白くスキーを享樂し得ると云ふことが解る。

露西亞新聞の體育欄には露西亞に於けるスキースポーツに關する悉しい論說が揭げられ N, Wassiljew, M. Gostev, A. Neimuchin, C. Norwid の筆はスキー指導をなすものである。露西亞に於ては十月が已に冬の先驅となるのであるが冬が近付くにつれてスキーランナーや、スキージヤムバーがあちらこちらに現れる。喜ばしいことには之等の卓越したスキーランナーに混つて美しい女性がスキーを享樂して居ることである。それはスキー滑走が體を丈夫にすると云ふことが充分一般から認められた結果である。又北方に於ける婦人の健康相な目の輝きは純粹な冷い日光の浸み渡つた空氣中での運動で得られると云ふことは古くから知られた事實である。

— 一九二六・七・二一 —

彙報抄錄

新着二書評

Der Schnee は彼のリリエンフェルデルスキーの創始者で有名なる Mathias Zdarsky 氏が創立せるウィーンの Alpen-Skiverein の雜誌で今回到着の分はその廿周年記念號である

内容は Alpen-Skiverein の昔の追憶が主となつてゐる。Zdarsky 氏も卷頭に Es war einmal! なる老人の昔話を書いてゐる。又、Prof. Leopold Winkler の Die Entwicklung des Skilaufes in Japan「日本に於けるスキー術の發達」なる記事が載つてゐる。

■

Skidlöpning はストックホルムにて發行された簡單なるスキー術の手ほどきである。これと云つて別に目新しいことは書いてない。中には多くの絵が這入つてゐてそれらの書に依つてスキーテクニック一般を説明してある。(健)

H. U. S. V. 新着圖書

Der Schnee. Jubiläums=Nummer.
(Zeitschrift des Alpen-Skivereines.)
Nr. 2 10. November 1925 21 Jahrgang

Skidlöpning av V. von Feilitzen

以上伯林においでになる木原均氏より御恵贈になりました

「山嶺」第八月號　野歩路會

「ヌプリ」十勝岳爆發號 NR. 4.　北海道山岳會

手稻山のヒユツテ

かねて北大スキー部創立十五周年記念事業の一つとして計畫してゐた手稻山腹ヒユツテは、最早殆んど材料の運搬も終り遲くも八月二十日頃までには建築が仕上る段取りにまでなつた。このヒユツテは獨人ヒンデル氏の設計になるシユワイツ風のものにして、全部丸太材を用ひ、その大きさは三間に五間、二階建なり。階下は食堂兼廣間。炊事場スキー置場等、階上は全部寢臺にして優に廿人は宿泊し得らるゝものなり。やがて竣成の曉は白樺その他の林に包まれ、溪流に臨んでその美しき姿を現し、集り來るシーロイファーをして喜悅せしむるであらう。(健生)

ニペソツ山登行行程

一行　澤本三郎　人夫金山、長田福松

七月十四日　札幌—

〃　十五日　上士幌—元小屋驛遞泊

〃　十六日　元小屋—メトセツプ出合より約五百米流下の中洲幕營（本流ホロカオトプケ川出合の約二千米下流）

〃　十七日　同中洲—ホロカオトプケ川遡行—六の澤（標高約六百六十米の點にてホロカオトプケ川に合す）—六の澤、下二股澤の出合幕營（標高約七百五十米、六の澤本流はニペソツ山、三角點の約一千五百米南の山陵に發し、下二股澤は中ニペソツより發す。）

〃　十八日　滯在。

〃　十九日　六の澤遡行—三角點より約一千五百米南の山陵—頂上—六の澤下二股澤出合幕營。

〃　二十日　六の澤下行—ホロカオトプケ川下行—二の澤との出合幕營（ホロカオトプケ川とオトプケ川本流との出合の約二千米上流）

〃　廿一日　ホロカオトプケ川下行—オトプケ川下行—ユウンナイ温泉泊。

〃　廿二日　元小屋泊。

〃　廿三日　上士幌—札幌。

所要地圖。芽登、芽登温泉、ニペソツ山。

羅臼岳登行行程

一行　須藤宣之助、山縣浩、外人夫一名。

七月十二日　札幌—網走

〃　十三日　網走—斜里

〃　十四日　斜里—ウトロ

〃　十五日　ウトロ—岩宇別温泉

〃　十六日　岩宇別温泉—イワウベツ川本流中流キャンプ

〃　十七日　中流—羅臼岳—鞍部キャンプ

〃　十八日　雨—滯在

〃　十九日　雨—滯在

〃　二十日　鞍部—硫黄山—鞍部

〃　廿一日　鞍部—羅臼岳—ホロベツ川

〃　廿二日　ホロベツ川上流—赤井川—ホロベツ村—ウトロ。

編輯後記

次第に暑熱が加つてゆく。八月と云ふのは少しスキーの話には遠い月だ。しかし眞のスキー家にとつて夏は來るべき冬に對する研究の時だ。この理由かは知らないが伯林の麻生氏から玉稿を寄せられ我々は深く感謝してやまない次第である。

又大島氏より貴重なる原稿「登山史上の人々」を送つて下さつた。我々は歡喜の聲をあげて御禮を云はなければならない。我々は早速八月誌上にその一部「ゲオルク・ウインラー」の分を載せさせて戴いた。

そして中野氏よりスキーテクニツクの研究を、新進原君より春の東北朝日岳の紀行を書いて頂くことが出來、かくして愉快な編輯を終つた。（健）

六十二號誤植訂正

	誤	正
一頁左より五行目	Verachten	Verachten
三頁右より一行目	雪がかかつて	雲がかゝつて
〃左より四行目	近つた	近かつた
四頁左より一行目	周圍が	周圍は
五頁左より十二行目	拔けが思い	拔が惡い
〃　六行目	空になつて、來て	空になつて來て、
六頁右より九行目	ニセカウシュペ	ニセイカウシュウペ
〃　左より九行目	プール	シュプール
八頁左より二行目	ヌタクカウシュツペ	ヌタクカムシュツペ
十一頁上段右より五行目	他圖	地圖
十二頁下段左より一行目	スタク	ヌタク
十三頁上段右より七行目	徑で	徑で
〃　左より七行目	ヌタプペツ	ヌタペヤンペツ
十三頁下段左より十行目	鞍初	鞍部
十五頁上段右より三行目	第一、二年	第十二年
〃　下段最後の行	藏江	藤江
十九頁右より一行目	フインランドラテイー	フインランドラハテイー
廿一頁下段右より九行目	スイスキー	スイススキー
廿七頁上段右から十行目	山高地	上高地
廿八頁上段左から七行目	赤石岳	赤石岳
スキーテクニツクの研究		
2頁下より六行目	A.fank として	A.Fank とそして
3頁下から十八行目	危險を	危險に
3頁下から三行目	堪えず	絕えず
5頁上から三行目	科面	斜面
5〃下から三行目	はゞ	ほゞ
5〃上から十二行目	調消し	帳消し
6頁下から三行目	スポルトロイテ	シュポルトロイテ

し無理にでも強く外方に壓し開き可成り強いボディスウイングをやれば可成り急角度の廻轉をしてターンを終る。大低のダウンヒル・テレマーク・ターンは此の要領が加味される。

然し此の種のテレマーク・ターンは可成り無理を利かせてやるものでよく外方にほうり出される。

私のノンビリした氣持になると云つたターンは此の種のものではない。

普通のテレマーク・ポジションより少し多目に前へ膝を出しテレマーク・ポジションになる。そしてそのスキーの內稜を立てる。但しダウンヒルターンであるから稜を立てると云つても斜面に對しフラットになる程度にきり行ひ得られない同時にその足の指を上にもち上げる要領でスキーのテイルを開く。然し決して無理をして開いてはならない。雪に對し左程足が苦痛を感じない程度で充分である更に同時に上体を前方に思ひ切りのめらせて、充分前にかゝりかつ內方は即ち谷側に傾く。ターンは開始される。此の時、只專念心懸ける事は、決して此のポジションを崩すまいと云ふ事だけで、此れ以上積極的にターンを助長さす樣な態度をミつてはよくない。そうして只成り行きをスキーにまかせて置くが良い。すると自然に大きなロングターンを畫いて、ダウンヒルが完成される。而も初めにとつた內稜の立てた程度にもよるが、或る所までターンすれば後は自然に斜滑降になつて了る。

此のターンの要領は前述した通り、初めのポジションを固定させて細工をせない事の他にも一つある。それは此のターンは前の如くロングターンであるから、眞谷向きになつて降る時間が比較的長く從つて此の時に急に速力が延びるので思はず体重が後足に移されてしまう。此の点をさける爲に眞谷向きになるすぐ前に上体を一度ウント前にかけ更に前足に体重をウントのせる事である。もし谷に向つた時、体が後に引かれたなら此のターンはブツコワシになる。此の二つの要領こそ最も大切である。普通のダウンヒル・テレマーク程細工ミ勞力ミを要せないのが取柄であるミ考へる。從つてノンビリとやる事が出來る。

場所がせまくては駄目。

傾斜が弱くては不都合。

雪の淺いのも同樣よくない。

習の初まりである。然しこれ以外に或は反對側に或は前方に等種々雜多に轉ぶ人は確に上達が早い。これは前項とちがつて、主にその人の運動筋肉の敏不敏によるものと見られる。右後に轉んだが故次には之を直さんとして前に轉ぶと云ふ譯で、前の失敗を繰りかへすことをさけ得るだけその人の運動神經は發達して居る多くの場合は、練習の當初、右後に轉んだ爲、次は此の樣に等と考へてもやはり前と同樣な失敗をくりかへすものである。

轉倒中、最も上達の見込みの無い種類は枯木倒しである。後の方へ、枯木の樣にドッとばかりに倒れる人は全く上達の見込が無い。

◇　◇

精神的な方面と運動神經の方面とこの二つにスキーの上達程度を分けると上述の樣な一種のスケールを作る事が出來る。筆者の貧しい經驗では、此等の種類の人達へのコーチの方法を全く異にして居る。前者への方法は、言ひ方が惡いが冷酷な待遇である。もしスキーの履き方が惡ければ知らぬ顏をして先へ歩く。ゲートルが解けて居ても氣の付く迄は棄てゝ置く。時には一喝を喰はせる。——私達の時代には一喝を喰はせる事もコーチの一方法と心得て居つた——それで直らない手合はこちらから御免をこうむつた。後者の場合はスキーの面白味を理解さす樣に努力せねばならない。一喝や知らぬ振りは禁物である。常に溫く接してやらねばならない。そうして、兎に角、一つのスロープを初めから終り迄轉ばない程度に滑れる樣にごく緩傾斜を選ぶ必要がある。

前者の樣な精神的な方面にスキーのふさわしく無い人は何時スキーを止して呉れても差支えの無い手合である。往々スキーを墮落に導く者が出る。後者は成可くスキーの面白味を助長させる樣に仕向けるが良い。かゝる者の中にスキーの眞の理解者が出るものである。

◇　◇

次に、ダウンヒル・テレマークの一つのヒント

新雪のやゝ深目の時は直滑降を一本で下まで飛ばすのがおしい氣持になる。ダウンヒルのテレマークでスラロームを畫き乍ら下る氣持は他のターンには得られない氣持がする。ノンビリした氣持である。急に春になつた樣な氣持がする。

ダウンヒル・テレマークで前出させたスキーのテイルを充分に、雪に對して少

れ迄にやつた運動でその人の進歩の程度の見當がつく。スケートをやつた經驗のある人は或る程度迄は甚だ上達が早い。他の運動をやつた人も全く運動から沒交渉であつた人よりも上達は早い。

然し筆者の經驗ではもつと違つた見方が出來る樣に思ふ。スキーの初心者の班制練習に當つて、觀察した事であるが、先づスキーの履き方を一寸練習させる。そして平地を歩かせて練習場迄行くのであるが、先づ第一にその時スキーの履き方の早い者は大体に於て上達も早い。此れは最初の日から直ちに觀察し得る事で可成り面白い現象である。履き方の遲い人は上達がおそい。總ての動作に不活潑である。自分は可成り此の現象を興味を以て觀察して來た。

此の事は主にその人の動作の機敏さの如何によるものであらうが、も一つさかのぼつて見る時は、その人の性質の如何と非常に關係がある樣である。性質と云ふより精神と云つた方が良いかも知れない。スキーの履き方の遲い人は少くともそのスキーの練習なるものに對する精神的の緊張味を欠いて居るのでは無いかと考へる。

又、私のその當時の觀察ではゲートル（當時は多くゲートルを卷いて居つた）のよく解ける人は遲い樣に思はれた。卷き方の上手な人は早い。これこても前記と同樣にその原因の大きなものはその練習者の精神的緊張味の如何では無いかと考へる。

ゲートルのよく解ける人やスキーの履き振りの遲い人に限つて、種々な方面にその精神的弛みを見る事が出來る。かゝる人は良くスロープの上で立つたまゝぼんやりして居る。決して疲勞した爲では無い。何故ならば疲勞するしないの問題にならない練習の最初からである。

可成り前から筆者はこの事をスキー上達速度の標準にして居るのである。

逆に考へれば常に精神の緊張して居る人はスキーの上達も早い。こんな人はスキーの練習ばかりでない。常の歩行から汽車や電車の乘降からすべてに現はれて來る。

◇　◇

次に滑際の練習の時、定まつて一種の型でころぶ人よりも、種々の型で轉ぶ人は上達が早い。大体に於て、右足前の人は右後に左足前の人は左後に轉ぶのが練

スキーテクニツクの研究

ヒント（一）（二）

中野誠一

スキーを下駄の樣に考へねば實際上のスキー術をマスターする事は出來ない。下駄をはいて歩く場合誰しも下駄をはいて歩いて居ると云ふ意識の中に歩いてゐる人は無いと同樣、スキーで歩いて居ると云ふ意識をはつきりともつて居る間は眞のスキーをマスターして居る者とは云ひ得ない。一寸違ふ言葉かも知れないが、所謂鞍上人無く鞍下馬なしの境地に至つて初めて眞のスキーを知り眞のスキーランナーとなり得るのである。

此境地に至る時はそのスキー術には直滑降も無い、ターンも無い、ジャムプも無い。有るは唯雪と人とである。雪に同化された人のみである。

然しながら此の境地を體現する迄には何年何十年、又は何百年とかゝるであらう。人一代の仕事では無い。祖父の時から孫の時代迄も要するであらうその時に至れば、一本邦スキー界には何時此の時代が來るか一初めてスキーテクニツクの研究などは顧られなくなるであらう。

然し、今の我等は猶その必要がある。合理的な組織的な、所謂テクニツクの研究なるものが必要である。偉大な天才の躍進は衆愚をその地位迄引き上げるカタライザーである。天才の活躍を望むは株を守つて兎を俟つと異らない。遇然を俟つの愚はとらざる處である。天才の活躍に代るものは科學であり又研究である。スキーテクニツクの研究は、天才を俟つ間の衆愚の努力である。衆愚の努力も又カタライザーの一つとして見られる。

尤も筆者の愚筆がカタライザーとなるかならぬか、これは問題である。無論自信はない。

◇　◇

コーチする人々へのヒント

スキーの上手下手は滑つてるのを見れば直ぐ判る。然し、これからスキーを試みやうとする人の將來の上手下手は判らう筈はない。大体に就て考へるなら、そ

スキー並附屬品
製作販賣

••(呈カタログ)••

札幌

小谷運動具店

電話 一五六八番
振替 七九六四番

豫約集募

北大スキー部創立十五周年記念出版

我が北大スキー部が北國の天地に我國最初にスキー術を輸入してより今年で十五周年を迎へることになりました。私どもの先輩が獨人コーラー氏により初めてスキーを見て此を札幌の馬橇屋に作らし、海外諸國の書籍を渉獵して一意研究に心を碎いてより十五年、或はアルペンに、或はシュプルングラウフに絶えざる努力の跡を刻みつけて來ました。

此等先輩の苦心の集積が今日のスキーの盛大を致した過去を顧みて、ここに記念的出版を敢て企てた樣な次第であります。私どもは山及びスキーに熱情を持たるゝ諸君の御一讀下さることを望んで居ります。

記念出版内容大項

一スキー部歴史　小川玄一
一想片　二木春松
一同　大島幸吉
一同　青山温泉の憶出　栃内吉彦
一大正二年冬？の富士スキー登山の憶出　角倉邦彦
一想片　（柳澤君）並河功
一同　大野精七
一同　成田秀三
一スキージャムビング用スキー製作に關する考察　廣田戸七郎
一スキー部創立當時の回顧　稲田昌植
一スキージャムビング練習方法に對する處見　Dr. Bauder　廣田戸七郎譯

一ザイルテクニック　田口鎭雄
一紀行（五月のオプタケシケ山脈）　山口健兒
一同（羅臼岳）　須藤宜之助
一同（武利岳）　西川櫻
一同（三月の槍、穂高）　和辻廣樹
一研究　大井上義近
一タ一ンの支配する素因についての概念　中野誠一
一山岳登行に際して自然の人体に及ぼす偉力　本多治吉
一本邦スキージャムヒング創始時代の研究の憶出　大矢敏範
一スキー滑走に於ける二要素に就て　岡村源太郎
一陽光の積雪に及ぼす影響の理論的研究　加納一郎
一ランディングテクニックの研究　伴素彦
一トレエーケホップと所謂グレンデシュプルングとの由來及其方法と應用範圍　廣田戸七郎
一スキージャムヒング飛型論　廣田戸七郎
一「板さん」―亡友板倉勝宜君の憶ひ出て　板橋敬一
一石狩平原の二日間　六鹿一彦
一新設記念ヒュッテ及指峰臺に就て　佐々木政吉
一改造せる我が固定飛躍丘について　青木信三・伊久秀春
一手稲山を中心としてのゲレンデスキー　松川五郎
一其頃　廣田戸七郎
一想片　赤松勳
一スキージャムヒングヒル築造處見　廣田戸七郎
一海外よりの寄稿豫定　木原均
一海外スキー家よりの通信　松方三郎
一譯詩、譯章、挿畫、その他　麻生武治

◇體裁　菊版、全部ポイント活字組
紙質上等、寫眞版約二十葉、全頁約三百頁
◇價格はすべて實費でお頒ちしたいと思つて居りますから、印刷の上でなくては確定致しませんけれども、概算豫定額は一部二圓五十錢送料十二錢であります。
◇刊行期日　十一月下旬
◇豫約申込期日　十月廿日まで
尚豫約希望のお方は右の期日までに概算豫定額及び送料を添へて左記まで御申込下さい。

札幌市北五條西十一丁目二番地（山とスキーの會内）
北大スキー部記念出版係
振替小樽八四九五

優秀なるレコードは
優秀なるスキーに依る!!

斯界第一
大量製産
ツバメ印スキー

全國有名店に有り

製造元
札幌市
中野商店
スキー部

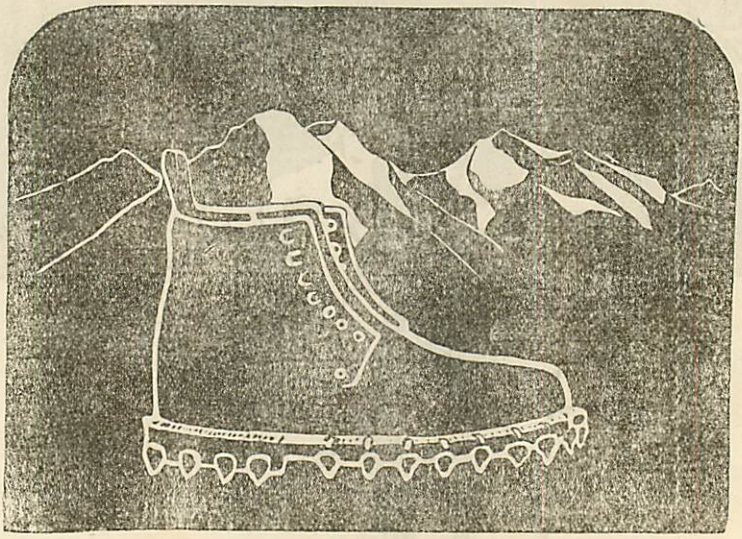
優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川七一二一番

振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定價 金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十五年七月廿八日印刷
大正十五年八月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者 山口健兒
印刷兼發行者 廣田戸七郎
印刷所 札幌印刷株式會社
北海道札幌市北一條西二丁目
發行所 山とスキーの會
北海道札幌市北五條西十一丁目二番地
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 63. Aŭgusto 1926. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二七日第三種郵便物認可
大正十五年七月廿八日印刷納本
大正十五年八月一日發行

山とスキー 第六十三號

定價參拾錢

TOKYO, JAPAN.

MIMATSU & Co., INC.

The Leading Winter & Spring Sports

美滿津の運動具！

呈進カタログ